

お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
TEL 045(681)1211・FAX 045(680)1550
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/

編集発行人・森 和雄

2018 / 3

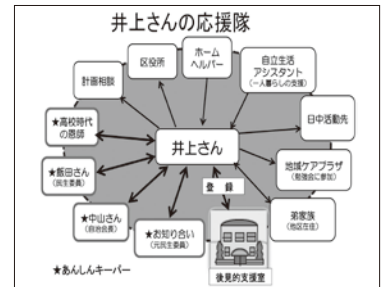
障害者後見的支援制度 「地域で暮らし続けたい」 障害のある方の暮らしを支える

去る十二月八日、第三回「よこはま地域福祉フォーラム(※1)」が開催された。その分科会「願いに寄り添い『暮らし』を支える」(一五七名参加)で、「つづき障害者後見的支援センターリリーフ・ネット」(以下「リリーフ」)の実践を報告した。井上さん(五十二歳)は、高齢の母と暮らしながら、民生委員の紹介で、平成二十三年、この制度に登録した。リリーフは、定期訪



「やっちゃん」が愛称の井上さん
困ったことがあると、中山さんに相談している。玄関の鍵が壊れた時も中山さんに相談し、団地の管理会社に連絡してもらい、修理したという。中山さん

問の中で、「この団地でずっと暮らしていきたい」と井上さんが強く願っていることを知った。そこで、井上さんに相談をし、見まもりのネットワークを作り始めた。その三年後、母が亡くなり、井上さんは一人暮らしに。それを契機に、井上さんとお付き合いのあった同じ団地に住む中山さんと飯田さんにもあんしんキーパー(※2)に登録いただく事になった。あんしんキーパー 中山さん 井上さんは日頃、



は「リリーフとともに、今後も井上さんを応援していきます」と話した。

あんしんキーパー 飯田さん 井上さんと五十年近い付き合いの飯田さん。「夏の炎天下、帽子をかぶらず送迎車を待つ井上さんを見かけた。熱中症が心配で井上さんに声をかけたが、帽子は嫌だという。心配でリリーフに相談してみた」と語る。あんしんキーパー(※3)の高柳さんが井上さんと話す時、帽子は蒸れるのでかぶりたくないとのこと。日中活動先に送迎時の配慮をお願いした。高柳さんは「定期訪

問だけでは、きめ細かく普段の様子を知ることが難しい。近隣の方々の日常的な見まもりや応援も得て、井上さんの地域での暮らしが長く続いて欲しい」と話す。

井上さんは「八十歳になるまでここで暮らし続けたい」と話す。リリーフは、今後も応援隊のみなさんと一緒に、井上さんの暮らしを支えていく。

◆平成十八年度以降、障害者自立支援法が施行され、身体、精神、知的の三種の障がい区分され、高次脳機能障害は精神保健福祉法の元、「精神障害」の手帳を取得する事になり、全国十二の自治体に参加、高次脳機能障害支援モデル事業により、障害評価基準が作成された。その後、都道府県で家族会設立の順に全国大会を開催、昨年神奈川県は設立二十周年の集いを開催、ほっとするの束の間、親亡き後問題が重く、如何になすべきや! ◆当会は県内二箇所で作業所を運営しているもの、ほんのひとにぎり! ひとりひとり抱える問題は異なるが故に必ず、医師、ケースワーカーの諸先生にご同席頂き、就労の会、女性の会、夫婦の会、疾病の会等々開催。交通事故が原因の当事者も多く、国土交通省、NASVAによる研修、懇談の会にも参加し、「あの時死んどきゃ良かったかなあ!」と言いつつ続けた愚息が時折「やっば、生きていてよかったですか!」と呟くようになりました。最良の助け人は時間でしょうか! (NPO法人脳外傷友の会 ナナ 大塚 由美子)

望遠鏡

『第四期障害者プラン』を考えたから現状の課題に具体的な対応を
「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」開催

重症心身障害(以下、重心)のある生徒の進路先確保は年々厳しさを増している。去る十二月十八日、標記連絡会議が開催(教育、家族、福祉、行政の各分野から二十五名参加)され議論を交わした。

現状
社会資源の地域偏在、医療的ケアの多様化・重度化

重心の生徒は二、三か所を併用して週五日を確保する場合が多い。また、併用に加え、区によって社会資源にバラつきがあるため、他区へ通所せざるを得ないことも多い。
医療的ケアも多様化・重度化している。要医療的ケアの方を受け入れている事業所は厳しい運営の中で創意工夫しながら生徒を受け入れているが、事業所の努力だけでは厳し



▲重心生徒の進路について熱心な議論が交わされた

平成二十九年度(平成三十年三月)の卒業生は肢体不自由の生徒は五十八名、要医療的ケアの生徒は十六名。重度重複の卒業生は毎年五十名前後、一区あたりで見ると、二~三名である。平成三十年度(平成三十一年三月)卒業予定の要医療的ケアの生徒(現高二)は二十七名。以降、毎年二十五名前後の要医療的ケアの生徒が卒業予定である。

い現状にある。具体的で計画的な事業所整備をして欲しい
重心親の会『ぼざばネット』会長の下山さんは、「横浜市は、『第三期横浜市障害者プラン』において市内六か所の多機能型拠点の整備計画をたて三館は整備された。四館目以降の整備を心待ちにしている。しかし、多機能

型拠点が整備されれば卒業後の進路問題が解決されるわけではない。同時に地域にもつと重心支援の日中活動の場ができないと不安はなくなる。進路対策研究会などのデータはあるので、いつ、どこにとといった具体的な計画的な事業所整備をしてほしい」と訴える。
『障害者プラン第四期』七館目の多機能型拠点を青葉区に

業するところには、人数やケアの質の面で安心して通所できる場がなくなるのではないかと不安から『未来の樹 あおば』を発足した」と言う。青葉区に要医療的ケアの生徒が通所できる日中活動の場を設けることが活動の目標。現在でも、それらの方は緑区や都筑区まで通わなければならず、遠方まで通所することはとても困難な状況とも言える。『第四期障害者プラン』では、七館目の多機能型拠点を青葉区に整備する事を盛り込んでほしいと要望する。

制度の充実を
また、事業所からも厳しい現状、課題が挙げられた。人員体制や施設環境を整備すればするほど赤字が大きくなるからだ。
横浜市が独自に設けている助成金の中でも重心の方を対象とした「自立生活移行支援助成事業」の見直しとともに、「借地・借家費

補助金」を同時に受けられるなど、安定した事業所運営ができるよう要望が挙がった。
拠点型施設の機能を
もつと発揮したい
『横浜医療福祉センター』の生田目生活支援部長らは、「地域の社会資源を支援していくには地域性も加味して、多機能型拠点、療養介護施設、医療型障害児入所施設などの拠点施設がその役割をさらに発揮する必要がある」と語る。

く受け入れ出来るようになるのではないかと佐藤所長。明確になってきた課題
重心施策を推進する
具体策の検討を
共催の『進路対策研究会』相田委員長は、「本会議は四回目を開催となり、これまで議論を重ね、課題も明確になってきている。この課題に対して、それぞれができるのかを具体的に、また建設的に考えていきたい」とまとめた。

職員のスキルアップ
一方、今年度より初めて要医療的ケアの方の受け入れをした『南福祉ホームむつみ』。「進路調査で南区在住の生徒を把握できたため、事業所として医療的ケアも提供できる医療室の準備や看護師の配置などを整備して受け入れ準備を行った。要医療的ケアの方を受け入れることで、職員のスキルアップにつながり、今後メンバーが高齢化してきても、長

※「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」は、重心生徒の進路状況に関する現状と課題を関係者で共有し、卒業後のより良い進路対策を検討することを目的に、進路対策研究会・横浜市社会福祉協議会障害者支援センターの共催で実施している。平成二十六年度に発足し、今回が第四回目を開催となる。

障害者週間シンポジウム 「とっかで暮らす」知ってもらいたい わたしたちの暮らし」



参加者も一体となって大盛り上がりとなったクイズコーナー。正解者には区内の事業所の製品がプレゼントされた。

「グループホーム」をテーマとして実施。職員や関係者だけでなく当事者にも一緒に関わってもらおう、入居者の方も受付や会場案内を担当し、会場には二百人が参加した。

障害者支援センターでは、平成二十九年度から新たに「当事者発・地域啓発支援事業」を実施。各区の区社会福祉協議会との連携・協働により、地域の中で当事者が講師として発信していく機会を生み出している。今回はこの事業を活用した取り組みについて紹介する。

障がい福祉分科会主催の障害者週間シンポジウム「とっかで暮らす」知ってもらいたいわたしたちの暮らし」が戸塚区グループホーム連絡会の協力のもと、男女共同参画センター横浜で行われた。同区で暮らす障害者が主役となり「思い」を発信するシンポジウムとして七回目の開催。今回は、以前のシンポジウムのアンケートで関心の高かった「グループホーム」を

グループホームで暮らすこと

第一部として、区内八か所のグループホームでの日常生活を撮影した映像「まちものがたり※」の上映や映像にまつわるクイズコーナーを実施。第二部では、入居者の方からの普段の生活に関する話や、ボランティアの方から日頃の活動についての発表が行われた。

入居者の方からは「ホームで夕食の手伝いなどができることが楽しい」「早く自立したい」と思い入居した「休日はガイドヘルパーと一緒に外出している」「お正月や夏に出かけたりすることが楽しい」「週に一回は帰宅している」「嬉しいこと」は職員が優しいこと」といったお話をされた。

会場との質疑応答では「お金の管理の仕方はどうしているか」や「休日は何をして過ご

しているのか」という質問に入居者の方がご自分のことを話す場面も。他にも、「グループホームの職員に資格はあるのか」「グループホームは何人で生活しているのか」「入居のために準備しておくことはあるか」など具体的な質問も多く挙げられ、グループホームへの理解を深める時間となった。

※「まちものがたり」戸塚区社会福祉協議会 障がい福祉分科会が作成した短編ドキュメンタリーDVD。これまで知的障害・身体障害・精神障害のある方の暮らしを紹介した「まちものがたり1・2・3」に加えて今回グループホーム版を作成した。「1・2・3」は無料で貸し出しも行っている。

問い合わせは戸塚区社会福祉協議会（電話：〇四五・八六六・八四三四）へ。



なすな会（港南区）
土山裕真さん



特急列車「カムイ」とともに

書道、ピアノ、鉄道：らく岩手をまわれないこと多趣味な土山さんの今のとが分かって、列島縦断一番の楽しみは、鉄道旅の旅はストップ。その後、訓練会仲間に行。

子どもの頃から鉄道が「日本一周旅行をする」と大好きだった土山さん。十万円貯まる本（旅行働き出して七ヶ月、お給をしたつもりで、国内の料が貯まった頃、本人の観光地が書かれた枠に五希望で「NHK列島縦断 百円玉をはめていく本」をいいただき、その本に書かれた行先を少ずつたどる旅を家族とともにの旅を再スタート。平成スタート。日本最北端、二十三年十一月に日本橋稚内駅から始まり、北海を出発し、この二月には道への旅を三回重ねて道改めて札幌時計台からオ内の鉄道を乗りつくしホーツクへ。電車の時刻た。青森に入った頃、東もすべて調べて、旅行の日本大震災が起き、しば行程は自身で組んでい



日本一周旅行をする
と十万円貯まる本
も楽しい。
土山さんの
日本一周旅行
は、まだまだ
続く。

第六回東日本大震災災害シンポジウム

～避難所の課題

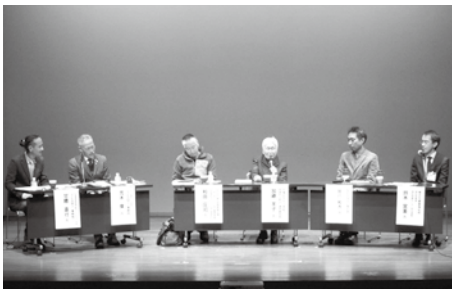
「情報」、「バリアフリー」、「遠慮」

去る一月二十六日、「災害シンポジウム」が開催された。参加者は地域の方を含む約百名。震災から七年、被災地から学び、今後の横浜の取り組みについて参加者とともに考えた。

福島からの報告

～和田さん～

和田さんは、発災後、郡山の五団体の仲間と共に、JDF被災地障害者支援センターを立ち上げた。その三月末、このセンターは、福島



災害時の取り組みを語る

「迷惑をかけるのではない」という遠慮の気持ちなど。和田氏は「それらの課題は、現在、そして今後の課題でもある。各地で早急に取り組みべき事ではないか」と訴える。

横浜市戸塚区「平戸小学校地域防災拠点」防災訓練参加について
加藤さん・皆川さん

当時の町内会女性部の加藤さんが「風の音（障害のある方の日中活動を運営する法人）と出会ったのは、その事業所の開所式に呼ばれた事がきっかけ。その後もういろいろな場面で触れ合いがあった。「私が地域防災拠点の委員長になり、風の音にも参加してもらおうようになった。一回目は、突然の大声など、地域の参加者も少々驚いていた。二回目になると障害の方から『こんにちは、また来たよ』と声をかけてくれた。

しだいに交流も深まっている。今後は、地域の障害のある方にどんな支援が出来るのか、どう参加を広げていけばいいか考えていきたい」と今までと今後を語る加藤さん。
風の音職員の皆川さんは、映像で訓練の様子を説明し、「年一回、九年間、地域の防災訓練に参加した。積み重ねが大事」と語る。

避難所の「バリアフリー化」が急がれるとともに、「地域の情報が届く」、「遠慮なく行ける」ようになるために日頃の関係が大切。参加者とともに改めて確認したことだ。

災害シンポジウムの概要

主催：横浜市障害者地域活動ホーム連絡会、横浜市障害者地域作業所連絡会、横浜市グループホーム連絡会、セイフティネットプロジェクト横浜

協力：TEAM 3事務局

主な内容

- 被災地からの報告
元JDF被災地障害者支援センターふくしま事務局 理事 長代行 和田 庄司 氏
- 横浜市戸塚区「平戸小学校地域防災拠点」防災訓練について
(1) 平戸小学校地域防災拠点 運営委員長 加藤 羊子 氏
(2) NPO法人風の音 職員 皆川 和夫 氏
- 横浜市災害時要援護者支援事業について
横浜市健康福祉局福祉保健課 福祉保健センター担当課長 鈴木 宣美 氏

リニューアル！ お店用コミュニケーションボードとチラシ



新しいお店用コミュニケーションボード (右が表、左が裏側)

「コミュニケーションボード」わかりやすい絵記号の載ったボードのこと。自閉症や知的障害のある人の中には、絵や写真等を使うことでコミュニケーションがスムーズになる人もいます。コミュニケーションのバリアフリーを図るための道具。

セイフティネットプロジェクト横浜が作るお店用コミュニケーションボードが、新しくなりました。主な変更点は、
■「案内します」などお店の場面で使えるイラストが増えました。
■自由に記入できる欄が大きく書きやすくなりました。
■各イラストの説明に、従来の日本語・英語のほか韓国語・中国語を追加。
また、周知チラシも、お店の人が接する際のポイントをより分かりやすく記載しています。より幅広い方々に向けて、使いやすくなつたお店用コミュニケーションボード。これから順次関係機関へ配布予定です。

本人とスタッフを支える 高齢期の知的障害のある方へのかかわり

支援現場では、知的障害のある方の高齢化への対応が課題となっている。去る一月十六日、「高齢期の知的障害のある方へのかかわり」に関する研修会を開催した。幅広い分野から約八十名が参加。

■早期の気づきの

きつかけに 第一部の講演者は『のぞみの園』（群馬県高崎市）診療部長の有賀道生氏。有賀氏からは、知的障害のある方の高齢化に伴う身体の変化や認知症の症状、医療対応、現場支援の在り方等が話された。



当日は多くの支援者が参加

有賀氏は「高齢化した障害者に『安心』と『安全』を保障するために、本人の状況（できること、性格、生活

今回は特に認知症について、気づきの契機になればとのねらいから「知的に障害がある人のための認知症判別テスト」（日本語版発行・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 *同園HPでダウンロード可）を使用したワークも取り入れた。この判別表は、例えば「言葉を思い出せない」など、「認知症に関する行動や症状」などの項目について、「従来もそうであった」、「最近よりできなくなった」などの回答で概況を判断するもの。もちろん、認知症の診断を確定するものではないが、気づきのきつかけとして活用できそうだ。

■自分なら？

〈高齢期の知的障害のある方へのかかわり〉

- 1 講義
「高齢知的障害者へのかかわり～心と体の変化について～」
◆独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 診療部長 有賀 道生 氏
- 2 実践報告
「偕恵園グループホームにおける高齢期の支援について」
◆社会福祉法人 偕恵園 障害者福祉サービス居宅関連事業所偕恵シグナル 居宅生活支援課 主任 中山 幸子 氏
グループホーム担当 白井 哲哉 氏
- 3 まとめ

リズム、好み、健康状態など）をしつかり把握しておくこと、変化を見逃さないこと、症状を抑えることに終始せず、行動の原因や背景を考え、支援の振り返りを行うこと、それらの情報を医療側へ十分伝えることが欠かせない」という。環境の変化や支援者の変更など、日常の変化が不安につながることも、支援者は自分のこととして想像し、受け止めて欲しいと締めくくった。

■今後の仕組みは？

二部は社会福祉法人偕恵園の中山氏、白井氏からグループホームの支援について報告。偕恵園では関係機関との調整役として中間支援コーディネーターを独自に配置、計二十のグループホームを運営している。入退院を繰り返す入居者を医療関係者との連携で支援した例などを報告してくれた。中山氏、白井氏は「グループホームでどこまで支えられるのか明確な解答はない。しかし、特に支援者の負担感や孤立感の軽減のため、バックアップの仕組みが必要」とまとめた。

一歩舎（鶴見区） 佐藤 公子さん



佐藤さんは元小学校の教師。一歩舎と佐藤さんとの繋がりは佐藤さんが現役教師だった頃にさかのぼる。五年生の授業で環境問題を扱った時、子どもたちが一歩舎に空き缶を届けるようになったのがきっかけ。その後も一歩舎と学校との交流は続き、佐藤さんは教師生活を引退した後、ボランティアを始めた。

一歩舎では結び織りや刺し子、受注作業などを行っており、佐藤さんは、このような作業の中で活動支援のボランティアをしている。「利用者の皆さんは、集中力もあり、とても熱心に働いている。刺し子ではそれぞれ個性的な色遣いで素敵な作品を仕上げ、結び織りも時間をかけて丁寧の一つの作品を作り上げています」と感心されている。「長い間ボランティア活動をしていると、嬉しい再会がある。六年生の担任として送り出した卒業生が養護学校の教師となってバザーに来たり、個別支援学級低学年で担任したお子さんが一歩舎に就職し、一緒にビールを飲んだりする。教師をしていてよかった。幸せ」と佐藤さん。最後に、ご自身の経験を振り返り、「個別支援級と交流のあったクラスの子供たちは障害に対しての理解が深まり、優しい気持ちが育っていく。交流する両者がともに育つことを実感した。今後も地域の方々と共に、一歩舎との交流が広がるようにしたい」と語った。



刺し子の作業をしている佐藤さん(左上)

あゆみ荘 だより

都筑ふれあいの丘 まつり開催

ふれあいの丘三施設（横浜あゆみ荘・都筑センター・都筑プール）と葛が谷ケアプラザ・都筑工場は、十一月十二日にふれあいの丘まつりを開催しました。

横浜あゆみ荘では、近隣区の作業所製品の販売やロビーコンサートなど大変多くご来場があり、大盛況のまつりとなりました。



Ko-sei ロビーコンサート

また、地域の方々にあゆみ荘をもっと知っていただくため、館内見学ツアーを行い、抽選で二組の方に無料宿泊券を差しあげました。



「カプセル釣」も人気

○余暇活動支援事業 「楽しい！ポッチャ競 技入門講座」開催

十一月十八日(土)・十九日(日)の二日間、障害のある方を対象に、パリンピックの正式種目にもなっているポッチャの入門講座を開催しました。



試合に熱中、大盛り上がり

当日は講師からルールの説明を聞いた後、上手に投げるコツの指導もあり、後半の試合

では、歓声あり笑いあいの熱戦が繰り広げられました。



審判の裁定に真剣に注目

あゆみ荘季節の飾り

あゆみ荘では、ご滞在のひとときが楽しい思い出になりますようにと、お正月、ひな祭り、端午の節句、七夕、ハロウィン、クリスマスなどにちなんだ飾りを館内に施し、お客様をお迎えいたしています。



「お正月飾り」

職員一同、皆様のご利用を心よりお待ちしております。◆和室の洋室化についてお知らせ

「洋室を増やしてほしい」と多くのご要望にこたえるため、この度、和室一部屋を洋室に改装することになりました。平成三十年四月一日からご利用いただける予定です。

支援センターだより

「感謝の集い」開催

「平成三〇年感謝の集い」が、二月三日(土)横浜ラポールにおいて開催された。

永年にわたり関係団体への物心両面からの支援・協力をいただいている方々へ感謝の意を表し、交流を深めることを目的に開催している。障害者支援センターの主催。

当日は、受賞者・来賓など約百五十名が参加、森センター長より

感謝状と記念品を贈呈した。受賞者代表の山本明様と石野えり子様のお二人から、活動を始めたきっかけや多くの方に支えられこまごま活動を継続できたこと、温かい気持ち・感謝の気持ちをもって今後も続けていきたいなどの挨拶をいただいた。



「式典」

また、アトラクシヨでは、「上菅田トリオ」のピアノ・バイオリン・歌のハーモニーと「虹色の仲間たち」のマリンバ演奏をそれぞれご披露いただき、会場を盛り上げた。

式典終了後は、懇親会に移り、参加者が交流を深めた。

【感謝の集い受賞者】

大貫利恵様、渡邊小代子様、藤田法子様、

南初代様、広田拓也様、鈴木里紗様、木村文恵様、栗田公子様、岡田雅代様、山中智子様、芹澤幹二様、渡邊裕樹様、我妻敏子様、池田紀江子様、関口好子様、田熊文乃様、小林弘典様、小林靖代様、岡部俊行様、蛭川徳美様、市川幸子様、山口弓子様、宮浦昌子様、沖幸乃様、加藤真紀様、鈴木航様、新井大瑚様、城所真悠美様、難波修様、石幡洋子様、杉山義和様、池田鶴代様、四家ひとみ様、小谷野辰巳様、乙川さよ子様、藤森満里様、高橋小百合様、工藤知子様、八島敏昭様、下山郁子様、嶺美紀子様、土山由巳様、石野えり子様、山本明様



「交流会」